

生活 & 総合 navi

表紙裏 ● い〜め〜る

柿沢安耶

特集

01 ● 地域からの発信
持続可能な未来へのヒントを探る

～共存の森ネットワークの取り組み(東京都世田谷区)～

04 ● 自然とともに学ぶ、全国初の「小学校農業科」最前線！
～福島県喜多方市教育委員会の取り組み～ 渡部 通

06 ● 収穫物でクッキング 大豆大変身！豆腐の巻
～つくて、食べて、諸感覚で感じて！～5年 坂口直子

08 ● 論壇 せめて嫌いにさせないで
～生き物を教えるということ～ 高槻成紀

12 ● 連載 おしえて！藤井先生 藤井千春
● 研究と実践

13 (総合) 希望をもってたくましく生きようとする子ども育成
～6年 未来の七郷まちづくりの学習を通して～ 亀崎英治

16 (総合) 他者とかかわりながら、探究的に学ぶ子どもの育成をめざして
～5年 氷見の恵み-ハトムギプロジェクト-～ 小栗千佳

19 ● 連載 ナカヤマヒロシのてだてだ⑩ 中山洋司

20 ● 連載 幼・保・小スロープ⑧
あたご幼稚園(高知県高知市) / 和田信行

22 ● 連載 特色ある実践を求めて 村川雅弘

24 ● 生活・総合への提言 濱邊昌子

26 ● ご当地料理紹介 伏見 稻荷寿司 杉山大門

27 ● わが町オススメ行事 福山ばら祭 藤永 忍
● いろいろ工夫して！

28 (作品編) 風をあげたら風の姿が見えてきたよ 丹羽洋彦

29 (まとめ編) いきもの大すき
～学びのストーリーをひも解く～ 山田純子

30 ● 資料館へアクセス 大牟田市立三池カルタ・歴史資料館 梶原伸介
● わたしの学校の特徴

32 神奈川県横須賀市立野比小学校 新倉邦子
裏表紙 ● 連載 Dr. 小林のこれなあに？ 小林辰至



い〜め〜る



K A K I S A W A A Y A

柿 沢 安 耶

東京都生まれ。
 おいしいだけでなく、食べた人が健康になれる料理やスイーツを提供する店を開きたいと志し、フランス料理や自然食などを学ぶ。
 オーガニック野菜生産者とのつながりからもっと野菜の魅力を伝えたいと考え、2006年に世界初の野菜スイーツ専門店「パティスリー ポタジエ」を東京・中目黒に開店。
 また、日本の「食育」や「農業」への関心も高く、小学校での食育セミナー、生産地での野菜づくり体験ツアー、料理教室講師なども積極的にやっている。
 2013年には、中目黒にデリカテッセン中心の「ポタジエ マルシェ」を開店。さらに、台北市内にレストラン「ポタジエ ガーデン」も開店させ、連日賑わいを見せている。

野菜が育った畑が想像できるケーキ

小学生の頃は、ぜん息やアトピー性皮膚炎があり、身体が大変弱く、体育の授業はよく休んでいました。ぜん息の発作が出てしまうと、一〜二週間ほど学校を休まなくてはならず、授業についていくのがやっとでした。そんな状態ではありましたが、とりわけ家庭科の授業が好きでした。また、動物が好きで飼育委員をしていました。

子どもの頃の夢は、実はブタを飼って暮らす仕事に就くことでした。しかし、畜産の仕事だとブタを殺さなくてはなりません。そんなとき、フランスの高級食材であるトリュフを掘り当てるブタの存在を知ったのです。子どもながらに、ブタと過ごすにはまずはフランスと思い、大学ではフランス文学科を専攻しました。そしてフランスに留学します。フランスでは、勉強のために、ありとあらゆるフランス料理を食べ尽くし、しまいには身体を壊してしまいました。そこから料理に興味をもつようになり、身体に優しいもの、食べた人が元気になる食べものをつくりたいと思うようになりました。わたしの身体は、古来から日本人が食べてきた、お米を中心に野菜と豆類を食生活にとり入れていくうちに、エネルギーが湧いてきて、

体力もつき、風邪もひかなくなったのです。そこで、より野菜に注目するようになりました。わたしの野菜パティシエの道が始まった瞬間でした。

わたしの好きな言葉に、「^{しん}土^ど不^ふ二^じ」という言葉があります。地産地消に近い言葉ですが、人間は自然の一部で離れられないものであり、その土地にできたものを食べましょう、旬のもの、その土地ならではのものを食べることが身体に合っている、という考え方です。

わたしの願いは、多くの人に野菜をもっと食べてほしいということです。そして、わたしの野菜ケーキには、「食で元気に!」という思いが詰まっています。野菜ケーキが野菜を好きになるきっかけになってほしいと思っています。そのケーキを食べることにより、その野菜が育った畑まで想像できるような、そんなケーキをつくってきたいです。

先生方には、「健康でいるための食事というものを、知識としてしっかり知っておくこと」が生きる知恵となるということ、子どもたちに伝えていただければと思っています。

特集

地域からの発信

持続可能な未来へのヒントを探る

～共存の森ネットワークの取り組み(東京都世田谷区)～

今年は持続可能な開発のための教育(ESD)に関する世界会議が日本で開催されます。その関連から里山の保全等「自然との共生」についての活動を行っているNPO法人 共存の森ネットワークの吉野奈保子事務局長に話を伺いました。



誕生！共存の森ネットワーク

今から14年ほど前に林野庁は、森とともに生きてきた人々を「森の手先・名人」という形で、毎年、選定・表彰する制度を検討していました。当時、そのための有識者会議があり、委員として作家の塩野米松先生や洪澤寿一(現・当団体理事長)らが入っていました。塩野先生から「名人らに表彰状をあげることは非常によいことだけれども、それだけでは床の間に飾って終わってしまう。名人が森とともに生きてきた技や知恵、心などを本当に次の世代につないでいこうとするのであれば、何かもう一工夫しないと企画倒れになってしまう。例えば高校生にそのおじいちゃんやおばあちゃんのところに話を聞きに行かせて、聞いて書くという形で記録に残すことができないか、その人の言葉、つまり話し言葉で文章をまとめていくという作業をやってはどうか」と提案がありました。そして皆が賛成し、文部科学省も賛同して、平成14年、『聞き書き甲子園』(毎年全国100人の高校生が名人に話を

聞き、記録を書き残す活動)が国の事業としてスタートすることになったのです。

とはいえ、国



▲3月に行われた『聞き書き甲子園』の様子

が毎年こういったことに予算をつけることは難しいので、NPO法人がプラットフォームになり、企業や団体の協賛、協力を



吉野奈保子
NPO法人 共存の森ネットワーク
事務局長

得て、2回目以降続けていく方法を模索することになりました

た。洪澤は当時、樹木環境ネットワーク協会というNPO法人の専務理事だったのですが、その協会です務局を引き受けようということになり、協会のスタッフだったわたしが担当者として任命されました。わたしは初めて事務局に携わるということもあり、右も左もわからなかったため、前年に参加した関東地方近辺の子どもたちに手紙を書いて、「今年も『聞き書き甲子園』をやります。昨年どのような雰囲気だったのか話を聞いてみたいので、誰か手伝いに来てくれませんか」と呼びかけました。すると、5人の高校生から返事がありました。その高校生パワーも加わり、第2回の『聞き書き甲子園』は、盛会のうちに終了しました。その後、彼らと様々な話をしました。すると、ある高校生から「名人は、日本の山は手入れが行き届かず、山が泣いていると言っていました。わたしたちは話を聞いただけで終わりにしたくありません。何か具体的な行動をすることができないでしょうか。」という申し出がありました。彼らは、平



▲「聞き書き」をしている様子

成15年、任意の活動団体として、まずは自分たちで“共存の森”という名前のグループを立ち上げました。それがこのNPO法人共存の森ネットワークの母体になっています。

翌年、千葉県市原市の県有林を借りて、活動が始まりました。また、関西や東北地方にある農山村の集落でも同様の活動が始まり、拠点がみるみるうちに増えていきました。これらの地域では、里山や棚田の保全活動をしました。高校生だった彼らも大学生になり、

さらに仲間を増やして活動をしていきました。また、『聞き書き甲子園』に参加する高校生の研修も、彼らが手伝ってくれるようになりました。

平成19年、NPO法人格を取得し、今では、山村に生きる人がどのような思いで森を育ててきたのかなど、農山漁村地域に暮らす人々の思いを受け止めた上で、何かできることはないのかということを考え、活動をしていく、そんな団体になっています。



取り組みの深化

森から始まった『聞き書き甲子園』は、今では、海、川分野にも広がりました。また、高校を卒業した彼らは、地域の人話を聞き、その地域の十年後のビジョンを描き、地域の人や地元企業の皆さんとも連携しながら、環境保全や地域づくりをサポートする活動もしています。

この「聞き書き」を通して自然を見つめると、単なる理科の知識としての自然から、その中でどう人が生きてきたのかという知恵や文化としての自然を知ることができます。それを知ったときの子どもの驚き

は、この上なく大きいものです。

こんな話を耳にします。生物多様性保全の活動を行うときに、「このエリアの里山については自分たちが保全活動をしますよ。」とNPOや保全団体が困ってしまい、地域の人が無関係なところで活動が行われてしまっているというような話です。わたしたちは、まずは地域の人に話を聞こうというところからスタートして、そこに暮らしている人たちと一緒に活動することを大切にしています。人と人、人と自然、世代と世代をつないでいくことが重要だと考えています。



学校とコラボ！

最近では、小・中学校の総合的な学習の時間の支援も行うようになりました。岡山県備前市立日生中学校では、アマモ場(海藻が茂る場所)の再生活動とともに、中学生が地元の漁師さんに話を聞く活動をお手伝いしています。もともとこの学校では、総合的な学習の時間で、1年生が漁協に協力してもらって牡蠣養殖体験を行っていました。2年生はハンセン病について、3年生は沖縄への修学旅行も兼ねて平和学習を行って

います。なかでも、1年生の牡蠣養殖体験は大切な柱になっていますが、海についての学習への広がりはありませんでした。

そこで、日生中学校に、地場産業の学習を深めるために牡蠣養殖体験をするだけでなく、アマモ場の再生活動にも取り組んで、海の環境について学ぶようにしてはどうかと提案したのです。子どもたちは、漁師さんに船へ乗せてもらって流れ藻の回収や種まきの作業を行います。単なる体験だけでなく、漁師さんへの「聞き書き」を通して、地域の歴史や暮らしを学びます。海の学習には、社会科や国語の要素も入っています。

日生中学校と協働してわかったことは、特色ある取り組みをしたいという際に、先生方だけではなかなか難しいということです。生活科や総合的な学習の時間などで、何か工夫をしたいと思っても、先生方は忙しくて時間が足りない。さらには、学校の予算も足りません。本当は発表会で東京に行かせたい、少し遠くても意味のある体験をさせたい。だけどバスを借りるお金がないというような話になってしまうわけです。よりよい教育をしたいと思っている先生ほど外部との接



▲日生中学校の生徒によるアマモ回収作業

点がほしいし、資金についても、人手についても、アイデアについても、いろいろな形で応援してもらえればと思っているのではないのでしょうか。ですので、これからはそういう先生方を支援したいと考えているNPOや団体などのネットワークを広げていきたいと考えています。

今年度から、林野庁はじめわたしたち等が主催し、『第1回学校の森・子どもサミット』を開催することになりました。8月に、森林環境教育に取り組む全国の小学校が東京に集結し、活動発表や自然体験活動を行

いました。このことも、先生方とのネットワークづくりの一助になればと思っています。



▲『第1回学校の森・子どもサミット』



共存の森ネットワークから先生へ

今の子どもたちは、スピーチのような形式で話をする機会はよくあると思いますが、じっくりと話を聞くという体験が少ないと感じています。ところが、聞くということは社会に出てからも非常に大事なことです。

「取材する」ということと「聞く」ということは違います。取材するというのは「相手の話したことから自分の必要な情報を得る」という行為です。聞くというのは「相手の気持ちになって考える」ことです。また、教育で問題になっていることの一つは、コミュニケーションがうまくとれないことであり、それを解消できる手段の一つとして聞くという行為があり、それは、コミュニケーションの原点です。今は特にICT化

が進んでいますから、みんな結果を求めて、ウェブページなどで検索し、それで知ったつもりになっているのです。ですがそれでは本当の意味で知ったということにはならないのです。生きた体験として落とし込めないのです。そのために様々な体験学習をしていく必要があるわけです。聞くというのはただ耳を澄ませるだけではなく、諸感覚を研ぎ澄まさなければできません。是非、聞くことを通して、相手がどういう気持ちでいるのか、背景に何があるのかが見えてくる、想像できる子ども、そして自分の中に閉じこもるのではなく、自ら自分を開いていける子どもを育ててもらいたいと思います。



さいごに



当NPOの特徴は、全国の高校生、大学生とのネットワークをもっていることです。高校生や大学生が小・

中学生を教えるというのは、学校の先生や大人が教えるのとはまた違った効果があるようです。ちなみに今年は、石川県生涯学習課が主催している小学生向けの海洋チャレンジプログラムを支援しています。

高校生や大学生との接点をつくりたい学校、あるいは、聞くということに関心のある学校がありましたら、是非お役に立つことができればと思います。

問い合わせ先

NPO法人 共存の森ネットワーク

〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-10-9 経堂フコク生命ビル3階

TEL: 03-6432-6580 FAX: 03-6432-6590 メール: nahoko_yoshino@kyouzon.org

自然とともに学ぶ, 全国初の「小学校農業科」最前線!

～福島県喜多方市教育委員会の取り組み～



前 教育部学校教育課
渡部 通 主査

続いて、自然とともに活動している喜多方市からの事例報告です。

●農業科ってどんなもの?

中央教育審議会において、外国語活動やICT教育が中心話題だった10年余り前、中教審の委員をされていたJT生命誌研究館・館長の中村桂子先生が、その当時、「農業こそ小学校で必修にする必要がある」と日本経済新聞のコラムで書かれていました。それを見た市長が、教育委員会に「これ、喜多方市でできないかな」と提案されたのです。とはいえ、当時の指導主事たちの間では、さすがに難しいだろうということになり、断る理由を探しに地元の農業高校へ視察に行ったのです。すると、その指導主事の一人が小学校の教頭時代に教えた子が在籍していました(中学校で不登校になり、その後その高校へ)。農業高校の先生方と話していると、その教え子は不登校のときは別人のように高校生活を過ごしているというのです。その理由を尋ねると、

- ①農業高校なので農作物はかなりのたくさんをつくる。
- ②命を育てることから、自分も育ち、農業をやることで責任感が育つ。
- ③学校に行きたくないのではなくて、行きたいと自然と思えてくる。

というのです。このことが、農業のもつ教育的な効果を追究するきっかけでした。

生きていくためには絶対に何かを食べなくてはなりません。その意味で、農業は人間にとって最も大切なものの一つであるといえます。農産物の生産過程を知らないというのは本来ありえないことだと思うのです。半世紀前までは、当たり前のように子どもたちも

生産の現場に携わっていましたが、今ではそのような機会が減り、その世代が中心になってきています。する

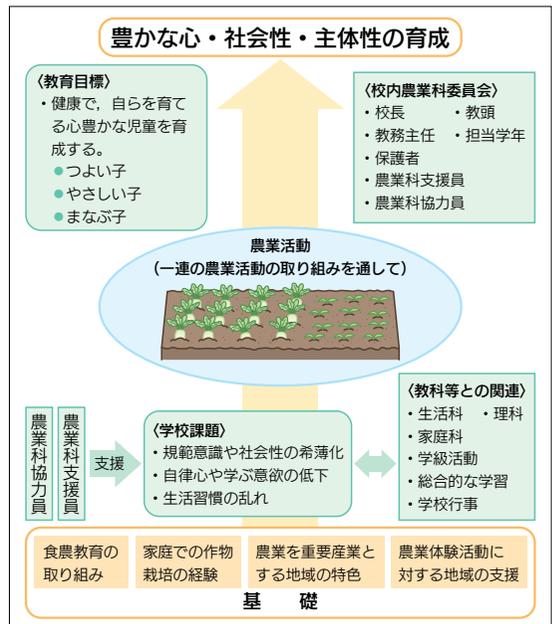


と今まで当たり前であったものが、だんだんと失われていくのです。そこで改めて農業に見出したのが、命や共生、思いやり、環境について学んだり、ゆとりや持続性、耐性、想像力、判断力、実践力を育んだりすることです。生きていく中で必要不可欠なのが、農業には全て凝縮されているのです。よって、その教育的意義を確認し、総合的な学習の時間の中で地域一丸となって取り組もうということになったのです。

●農業科のねらいとは

豊かな心と社会性、主体性を育てようということが最終的なねらいです。4年間系統的に続けることで達成できると考えています。単に学習というのではなく、もう一歩先にある人格形成にかかわる部分にまでたどりつくというのがわれわれの目標です。

農業科では、自分でやってみよう、こうしてみよう、ということがないと進めないところがたくさん出てきます。そのため、子どもたちが失敗することもありま



農業科全体構想図

す。しかし、それが大切なのです。喜多方市の小学校では、5年生と6年生で田植えをやる学校が多いのですが、5年生のときの失敗を生かし、6年生で再チャレンジすることができるのです。ですから、5年生の田植えと6年生の田植えでは田植えの質が全く違います。

農業科は、喜多方市の小学生に好評です。楽しく学べるということが一番のポイントではないでしょうか。正に好きこそ物の上手なれです。どろんこになっても怒られないし、作物が実ったときの成果が感じられる、それを体験できたことだけでも子どもたちにとって大きな財産となるのです。

●農業科の指導内容を教えてください！

どの小学校でも、主に、3、4年生は畑作を行い、5、6年生が稲作を行っています。授業時間数は、総合的な学習の時間の枠で、そのうち35時間を目安に行っています。

●全学年共通の指導内容

自然の循環(たい肥～収穫)における農業の意味や工夫について学ぶ。また、作物には命があることや、様々な命がかかわり合って農業が成り立っていることについても学ぶ。

●各学年の指導内容

3年生…1年間の農作業体験を通して、継続して作物の世話をすることの大切さを学ぶことができるようにする。

4年生…農作物を育てるためには、土づくりや苗づくり、除草などのきめ細かな作業が大切であることを理解できるようにする。

5年生…1年間の農作業体験を通して、食と健康とのかかわりについて学習し、食を守るための農業の大切さについて理解することができるようにする。

6年生…1年間の農作業体験を通して、自然界には様々な命が息づいていることや環境を守りながら自然

と人間が共生することの大切さを理解することができるようにする。



●農業科を実施する上での工夫や注意点は何か

・**工夫**…学校の先生だけで農業を教えるのは難しいと思います。専門的な知恵や技を駆使しなければなりません。また、子どもたちが自分でできることが重要で、それには、農作業が機械化される前の「手作業の農業」を知っている方が必要になってきます。まず、そういう人たちが応援してくれるような体制をつくるのが重要です。ゆえに、地域の協力、そして、PTAの協力も欠かせません。

・**注意点**…作物の選び方ですが、夏休みに収穫期を迎えるものは避けたほうがよいです。例えば、ナスやキュウリだと多くの場合、夏休みが収穫時期になってしまいます。毎日収穫しないとすぐに大きくなってしまふので、夏休みの期間はチェックが疎かになり、そのうちほったらかしになり、おたけ野菜になってしまいます。それではおいしくありません。無駄にしてはいけないことを学ぶことが、命の大切さを知ることにつながります。



●さいごに

「生きる力を育む」とは、本来どのようなことでしょうか。学力向上のことでしょうか。わたしは、学力向上が人間力に伴ってこそ初めて「生きる力」であると考えています。では、人間力とは、どのようにして育てたらよいのでしょうか。それにはやはり、体験から学ぶ、すなわち実体験から学ぶ、農業のように生活と密着している取り組みが必要なのではないでしょうか。農業は田舎のような広い土地がないとできないと思われる方もいるかもしれませんが、必ずしもそうではありません。校庭の片隅でもいい、プランターでもいい、屋上を緑化してもいいのです。都会だからできないというのではなくて、知恵を出し合い、みんなで一丸となれば、可能性が見えてくるのではないのでしょうか。



大豆大变身！ 豆腐の巻

～つくって、食べて、諸感覚で感じて！～
5年

坂口 直子 (佐賀県武雄市立若木小学校 教諭)

1 はじめに

若木っ子が「畑の学校」と呼び、親しんでいる広い畑。この畑に6月、ダイズの種まきをした。その後、「畑の学校」の世話を5年生でやろう！ということに…。子どもたちのアイデアで、看板づくりやかかしづくりが始まった。さらに、大豆博士になるための調べ活動をしていくと、ダイズはいろいろなものに変身することに気が出た。「自分たちの育てたダイズで、たくさんのダイズ料理に挑戦したい！」という声の方々からあがった。枝豆茹で、節分豆煎り、豆腐づくり、味噌づくり…など。以下、豆腐づくりを紹介する。



2 栽培活動のポイント

(1) 種まきは、まく日から1週間は晴れの日が予測される日をねらって行うこと。

(2) まいた後に、水やりをしないこと。

この2点を守るだけで、緑色のつやつやした枝豆が実り、たくさんの枝豆やダイズが収穫できること間違いなし！

3 つくって、食べて、諸感覚で感じる



育てたダイズでふわふわ豆腐づくり



＊材料（1丁分） ・ダイズ……………2カップ(300g) ・にがり……………20cc ・水……………14カップ

つくり方

- ① 水につけておく。 ※つける時間：夏は8～10時間、冬は16～20時間
・事前にダイズを洗い、7カップの水につけておく。
- ② 生臭なまこをつくる。 ※下の手順でつくったものを生臭という。
・水を吸ったダイズを、つけ水と一緒にミキサーですりつぶす。



3 生呉を煮る。

- ・大鍋に7カップの水を沸騰させておき、生呉を入れる。
- ・焦げやすいため、へらで底からかき回しながら強火で煮る。
- ・沸騰したら火を弱め、7～8分ほど煮る。



4 豆乳を搾る。

- ・煮た生呉をさらしの布袋に入れて絞る。その際、布袋の下にボウルを置く。
 - ・熱いので、軍手とビニル手袋を重ねて着けるとよい。
- ※搾り汁が豆乳、布袋に残ったものがおからである。



5 にがり液をつくる。

- ・にがり20ccを100ccのぬるま湯で薄める。

6 豆乳ににがり液を入れる。

- ・豆乳を弱火にかけ、鍋底からかき回しながら70～75℃に温めて、火を止める。
- ・ゆっくり混ぜながら、にがり液の3分の2ほどを少しずつムラなく加える。
- ・豆乳が固まり、1、2か所透明なところができたら、にがり液を入れるのを止め、ふたをして10分おく。



7 箱型に入れる。

- ・箱型にさらし布を敷き、固まった豆乳を入れる。
 - ・さらし布を上にかぶせ、上ぶたを乗せ、その上に300gくらいの重石を置く。
- ※重石は、コップに水を入れたものでもよい。



8 できあがり。

- ・15～20分後(上ぶたが3分の1沈んだら)、水の中で豆腐を箱型から外す。



4 おわりに

「畑の学校」で育てて収穫したダイズを使い、つくった豆腐の味は格別である。「お店で買う豆腐と味が違うね。」「ちょっと苦いけど、これが本当の豆腐の味だ!」、「ダイズが姿を変えて不思議だ。」など、諸感覚で感じた感想を口々にしながら、地域や保護者の方々とともに食べた。この学習後も、ダイズ料理に対する興味・関心は持続し、給食の時には「今日もダイズが入っているね。」という声があがる。

本校では、平成26年度、文部科学省指定のSSS(スーパー食育スクール)事業を受け、ICTを活用した食育を通して、生活習慣を改善する取り組みも行っている。例えば、栄養のとり方を自ら管理していく能力を身に付けさせるねらいから、毎日の朝食メニューをタブレットで入力させている。また、歩数計を1日中装着させ、運動量と食事摂取量による身体発育の相関関係を見取る取り組みも行っている。

せめて嫌いにさせないで 一生き物を教えるということー



高槻 成紀

麻布大学 獣医学部 動物応用科学科 教授。
東京大学農学生命科学研究科助教授、東京大学総合研究博物館教授を経て現職。
理学博士。専門は野生動物保全生態学。
二ホンジカの生態学研究に長く取り組んでいる。最近では里山の動物、都市緑地の動物なども調査している。

1 幼児の行動

やっと歩き始めたくらいの一歳児に芝生の上を歩かせると、必ずいやがる。皮膚のうすい幼児には芝生の葉の感触がチクチクするのか、あるいは痛いと感じるのかもしれない。こういう反応はどの子にも共通だが、ものに対する好き嫌いは子どもによっても違いがあるようだ。

わたしは動物を研究しているから、人を動物の一種としてみる。幼児は概して赤い色を好むらしい。これについて、赤い色は情熱的で印象が強いからだという説明がある。赤が印象的であることは確かで、目立つ色の代表といってよいだろう。消防車、救急車、ポストなどが赤であるのは、「赤」という色のそういう性質を利用しているのだろう。ではなぜ印象的であるのか。それは血の色であり、火の色であるからという説明には一定の説得力がある。

2 方向音痴

方向音痴は女性に多いようである。方向を知る能力に性差があるのを、動物学的にはどう説明するのだろうか。「ヒト」という「サル」の、三百万年ほどの歴史のほとんどはハンターであったとされ

る。サバンナ的な環境に進出したわれわれの祖先は、そこで草食獣などを獲るハンターであった。こういう環境での狩猟にはチームプレーが必要である。獲物を追い出すもの、追跡するもの、しとめるものなどの分業があり、それを組織的に行うためのリーダーが必要であり、成功するためには教育や訓練が必要である。大型の草食獣を捕獲するためには住居から遠くまで出かけ、動き回り、そして帰還しなければならない。そのためには地形を読み、印象的な場所を記憶するとともに、自分がどこにいるかを、いわば上空から見る想像力をもつ必要がある。それができない個体は道に迷って、最悪の場合は死ぬことになる。こうした役割を担ったのはオスであったから、オスのほうが地理感覚が発達したと説明できる。

一方、メスはすみかの近くで果実やイモなどを集めることが重要な仕事であった。オスとは違い、メスは遠出はしない。家に帰るには、空から見るような感覚よりも、「あの岩までもどったら、右にまがってあの木を左に曲がる」というように、ランドマークを確認しながらルートをたどるほうが確実性がある。買い物を終えて帰るとき、自分がどちらの方向に進んで

いるかとか、家からどういう位置関係にあるかということより、「あの信号の角をあつちに曲がり、あのマンションが見えたらこちらに進めばよい」式の歩き方をするのは、平均的にいえば女性に多い。

3 赤が好きなこと説明

さて、幼児が赤を好むことを動物学的に説明しようとするとうるのだろうか。わたしは、血や火を連想させるドキドキするような色を子どもが好むという説明は難しいと思う。赤はたしかに血や火の色ではあるが、同時にサルにとって重要なものの色でもある。それはベリーの色だということである。ベリーとは数ある果実のうち、果肉に水分を多く含み、しばしば糖分を多く含む果実のことをいう。イチゴやナナカマド、ガマズミの実などはその代表である。ベリーには赤やオレンジのものが多く。それはなぜか？その答えを知るには、そもそもベリーとは何かを知る必要がある。

4 果実の事情

わたしたちは何気なく果物を食べて、果物は人間の食べ物として存在しているものと思いがちだが、形を変えていようと、イチゴもカキもミカンもブドウも、も

ともとは野生植物である。品種改良によって今では人がいなければ育たないこれら栽培植物もすべて原種があり、ヒトを含むさまざまな野生動物の食べ物でもある。

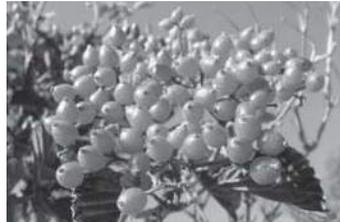
ではベリーは動物のためにあるのだろうか？ そうだとすると、そのことで植物は何を得るのであるのか？ ベリーをつくるためには、葉で光合成した生産物を大量に投入する。動物は喜んで食べるが、食べられることは植物には何のプラスもない。生物はプラスにならないことは決してしない。逆にいえば、していることはすべてプラスになる。

ではおいしいベリーをつける意味は何であろうか。それはまぎれもなく、種子を散布してもらうためである。ベリーの中には種子が入っている。これが植物の作戦である。哺乳類や鳥類においしいベリーを提供して、その見返りに種子を運んでもらおうというのである。

植物は動けない。親植物の下にポトンと種子が落ちて、暗いから発芽率は低く、発芽したとしても生育がよくない。そういう意味で、親植物は若い植物の敵なのである。そのためになんとかして親植物から離れようとする。いや、それは逆で、親植物が子どもを自分から離そうとする。そのための有力な手段の一つが種子を動物に食べさせるということである。

動物に食べてもらうためには、食べてもらったあとに「おいしい」と思ってもらうのでは十分ではない。食べてもらう前に「おいしそうだ」と思ってもらうほうが有利である。つまり広告が必要である。その一つが色である。葉は

*クロロフィルを主体とするから緑色である。その緑色の中で最も目立つのが、補色である赤である。森でも草原でも、緑の中で最も広告効果があるのが赤であり、そうであるから多くのベリーが赤い色なのである。まさに「万緑叢中紅一点^{ばんりくそうちゆうこういっぺん}」である。



ガマズミのベリー

5 幼児の赤好きを考える

このように考えると、幼児が赤い色を好むのは、血や火のように衝撃的な色だからではなく、ベリーの色だからだという説明のほうに説得力がある。狩猟採集をしていた長い間、母親に連れられてベリーを摘みに行った子どもは、遊びとしてベリー摘みをしたであろう。藪の中にある赤い実を見つけるのは楽しい作業である。子どもは隠れているものを見つけることが大好きだ。わたしたちが子どもの頃、「ドロップ」と言う缶入りのキャンディーがあった。缶の上に小さな穴があって、缶を逆さまにして振ると一粒が出てくるのだが、それが同じ種類ではなく、いろいろな種類が入っていた。色も味も違うので、どういふのが出てくるかが楽しみだった。思えばあれは、われわれの祖先の子どもが藪の中からベリーを見つける行動そのものだと思う。

ヒトは、ベリーやナッツを好むサルであった。そのDNAはわれ

われにも伝わっているに違いない。そういう好みが子どもの行動に現れ、赤い色が好きなのであろう。

6 乳児から幼児へ

三歳くらいまでの子どもは、言ってみれば本能の赴くままに生きている。とくに一歳までは生まれた社会にかかわらず、お乳を飲んで排泄をし、眠り、起きては泣き笑いをする。やがて離乳し、普通の食べ物を食べようになり、初めは手づかみで食べているが、そのうち箸を使って食べるようになる。国によって食べ物や食べる道具等に違いはあるが、徐々に「本能の赴くままに」から「その社会らしい」行動をとるようになる。

子どもの行動を動物学的に見ると、いろいろ面白い。一、二歳までは、男女にかかわらず動物や人形などに興味をもつ。庭に出すと昆虫など動くものに反応する。動かないものよりも動くものに反応することも動物学的に説明できるかもしれない。乗りものはヒトの進化にはなかったが、子どもが乗りものを好むのは動くものを好むことの延長線上にあるのだろう。それが出発点で、そこに、大きな力をもつものへのあこがれや、働く人へのあこがれなどが付加的な魅力となるのかもしれない。

五、六歳になると、男の子は乗りものやスポーツ、ゲームなどで遊び、女の子はままごとや人形で遊ぶ傾向がある。もちろん男女共通の遊びもあるが、一、二歳に比べれば男女の違いがはっきりしてくる。この違いは自然発生的なものもあるだろうが、すでに言葉を覚え、文字さえ覚えている年齢であるか

*クロロフィル…葉緑体に含まれる緑色色素。

ら、育った文化の影響を濃厚に受けているに違いない。

7 文化的影響

もし男女の違いがまったくない社会に育った場合、子どもがどういう遊びをし、どういうものを好むようになるかは大変興味があるところである。このことは同時に、教育のもつ意味がいかにかいかに大きいかを意味する。

子どもは食べ物の見た目や匂い、あるいは舌触りが気持ちが悪い食べ物を大人以上に拒否する。それを栄養バランスの説明することなどで是正するのが教育である。つまり、教えることで嫌いなものを好きにするわけである。

子どもは動くことが好きで、飛んだり跳ねたり走ったりするが、ほかの子と遊ぶようになると「かけっこ」という一種のルールのある遊びを覚え、さらにはスポーツをするようになると複雑なルールを覚えるようになる。これは、もともとある欲求を文化的なものでもさらに助長することであろう。

嫌いなものを好きにするのも、好きなものをさらに好きにすることも教育のよい面だと思う。問題は、本来好きなものを嫌いにしてしまうことである。

8 糞虫とシテムシ

わたしは少年時代から昆虫が好きだった。今も野山に出かけて調査をするので、少年時代の延長といえるかもしれない。そのせいで、今でも野山を歩くときは、昆虫には目を光らせている。長野県のある調査地で調査を始めてしばらく、わたしは糞虫の姿を見ること

がなかった。それに野生動物の糞を見ることもほとんどなく、動物の死体を見ることもなかった。最近では自動撮影カメラが普及したので、設置しておく、ツキノワグマ、タヌキ、キツネ、アナグマなどいろいろな哺乳類が生息していることはすぐにわかった。にもかかわらず糞も死体もみないのである。

ある年、学生と一緒に糞虫と死体分解昆虫（シテムシ）を調べることになった。そのためにトラップ（ワナ）をつくることにした。糞虫トラップは、小さなバケツを地面に埋め落とし穴のようにして、バケツの上に割り箸をわたして、その割り箸にティーパックをぶらさげて、その中にウシやウマの糞を入れておくもの、一方、シテムシトラップは、ペットボトルを加工して、側面に「窓」を開けて、中にマウスの死体をぶら下げるものである。これを森にしかけた。

翌日、トラップを見て驚いた。見たこともなかった糞虫や死体を分解するシテムシの仲間がたくさん入っていたのである。この昆虫たちを見てわたしはたちどころに「森の話を聞いた」気がした。

わたしが野生動物の糞や死体を見なかったのは、こういう分解者たちがたちどころに分解していたからである。逆に言えば、彼らがいなければ森には糞や死体があちこちにあるはずである。いないと



サル糞を運ぶオオセンシコガネ

思っていたときは、何も起きていないかと思っていたが、そうではなく死体も糞もあり、消えているという森の話が聴こえていなかっただけのことである。

9 糞虫の評価

さて、糞虫やシテムシに対するわれわれの評価はどうであろう。例えば、小学生の男の子が糞虫を見つけて家に持ち帰ったとしよう。「まあいやだ、そんな汚い虫、早く捨ててきなさい」

多くの母親はそう言うのではないだろうか。

それはある意味で適切な発言である。糞は不潔である。自然界には危険なものも不潔なものもたくさんあるから、注意して適切な対応をすべきである。だがわたしが問題としようとしているのは、ヒトというサル的一种であるわれわれの本来の行動との関係である。

10 変わらないもの

原人の頃から、いつの時代でもヒトの子どもは野外で遊んでいた。そして動物を見つけて捕まえてかまれたり、毒虫にさわって手がはれたりすることもあったろう。そうした危険を体験し、繰り返さないようにしたであろう。そういうことや、どこに行けばどういう動物がいるか、おいしい木の実はどこにあるか、といったことを年長の子が教えることもあったろう。

そうしたことは日本社会で言えば昭和30年くらいまでの、農業的社會が健康であった時代までは続いていた。都市の空き地にも昆虫はたくさんいたし、ちよつとした

小川にはカエルやドジョウがたくさんいた。子どもは虫とりやカエルとりをする中で、かすり傷をし、さまざまなことを覚えていった。

しかし現在では、親になる世代が子どもの頃、すでに多くの場所で里山の環境は失われ、そのような環境に育っていない。都市生活者が圧倒的多数になり、虫とりや魚とりを日常的にする子どもは「絶滅」したと言ってよい。そういう世代は自然がどういうものであるかを知らない。家の中にはネズミやゴキブリは言うに及ばず、カモハエもない。清潔感覚が異様に強く、抗菌グッズを求める。これはヒトが進化の歴史でまったく体験しなかった生活環境である。

生活様式が変化しても、動植物を食べて排泄するというヒトの生活はまったく変化していない。このことは宇宙に行っても一切変わらない。そういう意味での遺伝子はまったく不変なのである。子どもが動くものに興味をもつことも不変である。そうであれば、自然から受ける様々なもの、例えば、でこぼこの地面を歩いて転ぶこと、草でかすり傷をすること、といった「小さな不愉快な体験」はするものとしてヒトはできているはずである。わたしが言いたいのは、不潔でよいということではもちろんない。そうではなく、自然界には大小の危険があるものであり、われわれは小さな危険を体験することで生き延びてきた集団の子孫なのだ、という事実を正しくとらえるべきだということである。

11 生き物を教えるということ

そのように自然から隔離された

生活者の二世、三世が、今、学校の教員になる時代になった。その中で「生活科」があり、子どもは生き物のことを学ぶ。生き物を紹介するときに黒板にかいたり映像を見せたりするのと、実物を見せるのでは印象が大きく違う。もともと好きな動物のことを先生がどう話すかに大に関心があり、その説明は子どもに大きな影響を与えるはずである。

欧米ではオオカミが悪魔の動物とされ、「赤ずきんちゃん」などでイメージが増幅され、汚らしい動物とされた。人と動物との距離も東西では大きく違うが、オオカミに対する欧米人の憎悪や嫌悪は信じられないほどのものがある。その渦中にいれば気付かないが、偏見とはそうしたものであろう。

同じ意味で、糞虫やシテムシのことを考えたい。すでに述べたように、これらの昆虫は、自然界で糞や死体の分解というきわめて重要な役割を担っている。鼻つまみ者が実は偉大な仕事をしているのだ。それを見たこともないのに「汚くない」と決めつけて否定するのは、欧米でのオオカミ同様、正しくない。すべての生き物は、わたしたちの想像を絶する長い時間をかけて、生まれ、ペアを得て、子どもを産むという営みを続けて今がある。大切なのは、誤った先入観を排して、生き物のすべてがそれぞれに尊いという気持ちをもつことである。だが、見たことも、さわったこともない動物にそうした敬意をもつことができるはずはない。人は知らないものには警戒心をもち、なじむことができないからだ。

誰も心から確信をもてるこ

とでなければ教えることはできない。そうでなければ子どもの心に届くはずがない。子どもは文字よりも聞こえる言葉に頼り、言葉から心を感じ取り、直感的に理解する。そうであればこそ、心にはないことは伝えることができない。子どもは、虫をさわることのできない先生が、動物を大切にしないということの虚偽を見抜く。

わたしには大嫌いな言葉がある。「子どもだまし」である。この言葉の本質は何であるか。大人は物事がわかっているが、子どもはそうではない。大人は複雑だが、子どもは単純だから、サンタさんなどいないがだまされるという傲慢に由来する。わたしは、本当は子どものほうがだまされることができないと思う。子どもは言葉が使い切れないだけに、直感が優れている。大人は頭で動物園の動物をけっこう幸せだと考えるが、子どもは動物が悲しんでいることを直感する。どちらが優れているか、答えは明らかであろう。その子どもをどうしてだまされることができるだろう。

命について教えるということは軽々しいことではない。それは真剣勝負でなければならず、そこには嘘があってはならない。そうであれば、動物を大切にしないという先生が、昆虫を嫌いであることは許されないだろう。子どもに命を教えるのであれば、先生自身が動物を好きになるほかない。そして、子どもがせめて生き物を嫌いにならないようにしてもらいたい。担当の先生に考えていただければ幸いである。

おしえて！ 藤井先生

藤井千春

早稲田大学 教育・総合科学学術院教授。
博士（教育学）。1958年千葉県生まれ。
筑波大学大学院博士課程修了。
茨城大学助教授などを歴任。
ジョン・デューイの哲学と教育学を研究。
著書 『問題解決学習のストラテジー』
『子ども学入門』『問題解決学習の授業
原理』（いずれも明治図書）など多数。



Q 総合的な学習の時間の調べ学習において、子どもたちの活動は、ともするとインターネット上の情報のまとめで終わってしまいがちです。単なるまとめに終わることがないように、どういったことに注意してインターネットを活用するとよいでしょうか。

A このような学習活動は、しばしば皮肉を込めて、「検索→プリントアウト→切り貼り学習」、あるいは「お調べ→書写→朗読学習」などと揶揄されています。

総合的な学習の時間の学習活動で、コンピュータに関する技能を習得させることは重要なことです。しかし、この時間の趣旨に照らすならば、**子どもたちが、課題達成の探究における手段として、必然性をもってインターネットを活用することが重要です。**

探究において、「調べる」という、情報を集める活動は、課題をやり遂げるための、あるいは問題を解決するための手段として位置付きます。例えば、自分たちで育てて収穫したお米を使って、「ライス・パーティー」をするという課題を達成する過程では、自分たちのグループで料理するピラフ、あるいは雑炊など、それらの作り方に関する情報を集めるというように、調べ活動を位置付けることが必要です。

そのように位置付くと、子どもたちは情報収集だけではなく、得られた情報の選択や内容の吟味にも真剣になります。自分たちで育てたお米を使

ってつくる料理を失敗したくない、また、食べた人から「美味しいよ」と評価をもらいたい、などが動機となるとき、より多くの情報を得ようと、また、適切な情報を選択しようと、さらには情報の内容を正しく理解しようと、子どもたちは真剣になります。課題を成功させたいという意欲が、情報の収集・選択・吟味を真剣なものにするのです。このようにして情報活用能力は育つのです。

したがって、**調べ活動で終わっている学習活動は、探究としては成立していないのです。**また、調べただけの内容の発表は、聞き手への意識の薄い「朗読」に終わりがちです。そのため、聞き手の興味・関心を引き出されないままに終わりがちです。「言語活動の充実」した学習活動とは言えません。当然のこととして、情報の意味の理解は浅く、吟味はなされていません。

優れた情報を得て、それを十分に活用するという調べ活動は、課題達成に向けての必然性のある探究の中で行われるのです。





研究と実践①



総合

希望をもってたくましく 生きようとする子どもの育成

～6年 未来の七郷^{しちごう}まちづくりの学習を通して～

亀崎 英治 (宮城県仙台市立七郷小学校 教諭)

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、仙台市若林区にある本校学区は、一部が津波で浸水するなどの甚大な被害を受けた。それ以来、本校では、「ともに立ちあがろう！七郷」を学校全体のスローガンとして、校内研究において復興学習に取り組むことになった。将来を見据えて、震災復興の担い手となる子どもたちを育てることが学校の果たす役割ととらえ、第6学年の総合的な学習の時間においても、未来志向型の復興学習を展開していくこととした。

2. 実践のねらい

広く外部の方々と関係をつくって復興につながる学習活動を実践することにより、震災の影響を受けた地域のために何ができるかを考えさせ、未来に向けて希望をもちながらたくましく生きようとする子どもの育成をめざす。

3. 未来志向型復興学習の授業デザイン

(1) 未来志向型探究学習の展開

震災の記憶を思い出させるだけでなく、震災の経験を生かしてこれからの社会や自分の生き方を思考していくような未来志向型の探究学習を展開した。

(2) 育てたい資質や能力の明確化

震災の教訓をもとに復興学習でめざす子どもの姿を設定し、学習活動がどんな力に結びつくかを意識しながら進めていった。

(3) 外部連携による復興学習の単元開発

今までの地域学習を土台としながら、大学や行政、民間、NPO等と連携して現実社会とつながりをもった単元を開発した。

4. 研究概要

(1) 単元

「未来の七郷まちづくり」(30時間)

(2) 単元目標

七郷地区の自然や歴史、人のつながりを体感する活動を通して地域に愛着と誇りをもち、未来のまちの姿はどうあるべきかを多面的に考え、地域の一員として七郷のまちづくりにかかわろうとする。

(3) 育てようとする資質・能力・態度

【学習方法に関すること】

ア 必要な情報を収集し、分析する。

イ 課題解決をめざして事象を比較したり関連付けたりして考える。

ウ 相手や目的に応じて自分の考えをまとめ、表現する。

【自分自身に関すること】

エ 目標を設定し課題の解決に向けて行動する。

オ 自己の将来を考え、夢や希望をもつ。

【他者や社会とのかかわりに関すること】

- カ 他者と協同して課題を解決する。
- キ 課題解決に向けて地域の活動に参加する。

(4) 内容

| 学習課題 | 学習対象 | 学習事項 |
|----------------|------|--|
| 地域や学校の特色に応じた課題 | 防災 | <ul style="list-style-type: none"> ・災害の恐ろしさと防災意識の大切さ ・災害に備えた安全なまちづくりにかかわろうとする活動 |
| | 復興 | <ul style="list-style-type: none"> ・歴史や自然、そこに住む人々に触れて、故郷のよさを再認識する活動 ・人と環境の視点から暮らしやすいまちの姿を考える活動 |

(5) 年間計画

| 単元 | 学習活動 | | |
|-------------|---------------------|--|---|
| ふるさと七郷まちづくり | ふるさと七郷再発見 (前単元) | <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・イグネ(屋敷林)調査活動 ・用水の生き物調査活動 ・遺跡発掘見学活動 ・ニコン写真教室 ・七郷自主研修 ・ふるさと七郷写真展 | 導入 調査 " " 講義 調査 発信 |
| | 未来の七郷まちづくり (本単元) | <ul style="list-style-type: none"> ・レクチャー ・資料調査活動 ・聞き取り調査活動 ・見学調査活動 ・構想を練る活動 ・模型製作活動 ・完成披露会 ・報告書の作成 | 導入 調査 " " 計画 表現 発信 まとめ |

5. 指導の実際 ～授業デザインのポイント

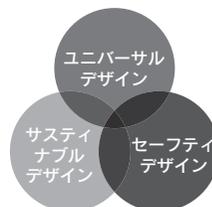
(1) 前単元とのつながり

前単元「ふるさと七郷再発見」の学習では、自然や歴史、施設、そこに住む人々など、七郷のまちの今の姿や昔を感じるものを見つけてくる地域自主研修を行った。企業からお借りした一眼レフカメラを持たせ、子どもたちは、イグネの古木、震災直後に食べものを提供してくれたお店、仮設住宅で元気に暮らす人たちなど、七郷の魅力と感じたものを写真に撮ってきた。

写真という表現方法とともにキャプション(説明文)を入れることで、文で伝える大切さも実感できた。この活動が、その後の未来のまちを考える観点につながっていった。

(2) 意欲を喚起するレクチャー

本単元の導入では、都市・建築デザインの専門家である山形大学の佐藤慎也先生をゲストティーチャーとしてお呼びした。まちづくりの歴史や日本と西洋との違い、フィンランドのまちの紹介などをし



まちづくりに大切な三つの視点

ていただき、まちづくりに大切な三つの視点を提示してもらった。

- ①ユニバーサルデザイン(人・文化から考える)
- ②サステイナブルデザイン(自然・環境から考える)
- ③セーフティデザイン(防災・安全から考える)

子どもたちは大学生になった気分で受講した。佐藤先生からの「未来の七郷のまちの姿をみなさんから提案してほしい。」という投げかけにより、子どもたちの意欲は高まり、活動に見通しをもつことができた。

(3) 学びのある調査体験活動

どの視点でまちづくりを行っていきたいか、三つの視点の中から選択させ、インターネット等で資料調査を行わせた。さらに、ユニバーサルデザインの視点を選択した子どもたちを中心に聞き取り調査活動を行い、いろいろな年代や職業、状況の人たちの意見を聞いて自分たちのまちづくりに取り入れるように助言した。

本単元の中で行った見学調査活動は、現地見学会である。仙台市営地下鉄東西線の荒井駅建設に伴った新たなまち、津波で家を失ってしまった人たちのための復興住宅の建設が進められている様子を見学させた。子どもたちは、住宅予定地を歩きながら、田んぼが埋め立てられ、魚とりをした水路やイグネもなくなってしまう現実を知り、開発と復興のまち



づくりにおいては、何を残し、何を新しくつくるかを考える必要があることに気付いた。

(4) 構想を練る活動

本單元では、未来のまちの姿を模型に表現する活動を取り入れた。エリアは学校周辺のまちで、今までのまちと新しくつくられるまちの両方が含まれている。クラスごとに模型に表現して、四つのまちの姿を提案する。未来の時期は、話し合いで10～15年後に設定された。

一人ひとりが、選んだまちづくりの視点に沿った具体的なアイデアを考えた。市長役の子が中心となってクラスごとのまちづくりのテーマを決めた。

1組：人と時がつながったハーモニーシティ七郷

2組：緑と太陽を生かしたまち七郷

3組：絆が深く美しいガーデンシティ七郷

4組：おもてなしの心あふれる七郷タウン

活動が進むにつれ、つながりや絆、おもてなしなどを模型にどう表現していくかが鍵となっていった。

(5) 思考を伴う模型製作活動

模型製作のよさは、アイデアが変更された場合でもつくり替えるのが可能なことである。子どもたちは、話し合いを繰り返して何度も修正しながら自分たちのアイデアを模型に表現していった。



《人と環境の視点からの思考・表現》

子どもたちは、地下鉄の開通や新たなまちの建設によって便利さを望む一方で、田んぼの風景や地域のつながりなど、「七郷ならではのよさ」を失ってほしくないという思いも抱いていた。人と環境の視点でどうバランスをとっていくかを、思考・判断しながらアイデアとその表現としての模型の見直しをしていくこととなった。

《つながりからの思考・表現》

製作途中でそれぞれの模型を合わせてみると、まち全体の姿となる。しかし、よく見ると、子どもたち

は、まちとしての統一感がないことに気付いた。市長役の子がクラスみんなに指示を出して、協力し合いながら街路樹や用水路などのつながりを見ていき、住宅の戸数や全体に広げるアイデアなどを考えていった。さらに、病院や警察署など、まちとして必要な公共施設や機能をどこに置くか、10年後の進化した姿になっているかなども考慮しながら、ようやく一つのまちとして形が整えられた。

(6) 子どもたちが提案するまちの姿

今までお世話になった方々を招待して、完成披露会を開いた。模型をみただけでは伝わらないので、模型を使って一人ひとりに具体的なアイデアを説明させた。

「わたしは、みんなが使える畑をつくりました。野菜は、七郷の曲がりネギや仙台白菜などです。農家の方からアドバイスを受けながら育てることができません。」

「浄水施設を設置しました。災害で水道が止まったときに、用水路の水をくみ上げて飲み水にします。」

説明を聞くことによって、はじめて模型に込められた意味がゲストに伝わった。なお、模型はそのまま残しておくことができないので、「未来の七郷まちづくり報告書」としてまとめ、ゲストの方々や行政の人たちに配布して学習を終了した。



6. おわりに

実践したまちづくりの学習は、震災を経験した子どもたちに、これからの社会に大切なことは何かを考えさせ、未来に対して明るい希望をもたせることができた。2014年3月、日本ユニセフ協会主催のシンポジウムに子ども市長4名が参加してきた。震災時の経験や未来のまちづくりについて熱心に語る子どもたちの姿にたくましさを感じた。今後も継続して、復興の担い手となる子どもたちを育てていきたい。



研究と実践②



総合

他者とかかわりながら、 探究的に学ぶ子どもの育成をめざして

～5年 氷見の恵みーハトムギプロジェクト～

小栗 千佳（富山県氷見市立湖南小学校 教諭）

1. はじめに

本校が所属する氷見市の小学校教育課程研究会総合部会では、「他者とかかわりながら、探究的に学び、自分の生き方を考えていこうとする子どもの育成をめざして」を研究主題とし、総合的な学習の実践研究を行っている。研究を進めるにあたり、三つの視点を設けている。それは、①探究的な学びを生む単元の構想、②確かな学びをつくるための評価と指導、③他者と豊かにかかわり、協同的に学び合うための教師の支援、である。実践にあたっては、それらを考慮し、指導した。

本校は、全国のハトムギの1割を生産している氷見市の農耕地帯にある。子どもたちにとってハトムギは、栽培されている様子をよく目にする身近な農作物であり、自分たちの手で栽培したり加工したりする体験ができるものである。また、JA氷見市では、大学と協力してハトムギ研究に取り組み、新商品の開発を進めている。このように、ハトムギは地域活性化につながる可能性を秘めた魅力的な素材なのである。

その一方で、生産者の高齢化や安い外国産のハトムギの輸入による需要の伸び悩みなどの問題もある。こういったハトムギのよさや問題点を見つめ、「わたしたちのふるさとのハトムギはこのままでよいのか」、「ハトムギでふるさを元気にできるだろうか」という問題意識を継続しながら追究を進めさせたいと考え、本実践に取り組んだ。

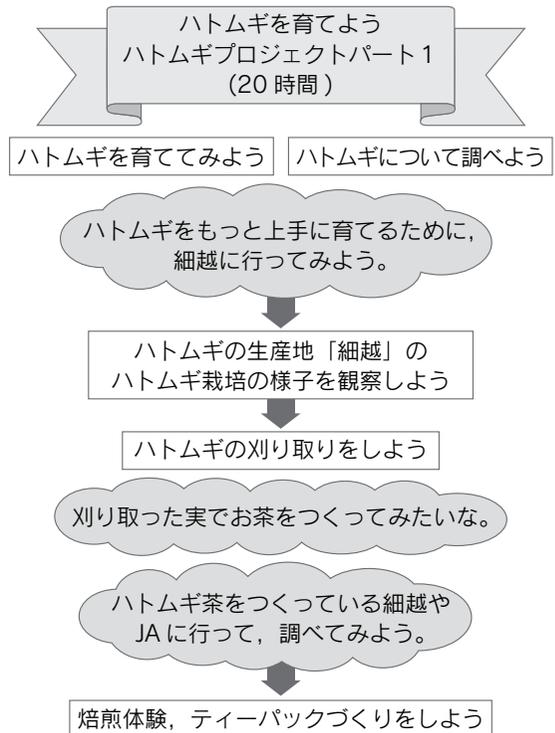
2. 研究の実際

(1) 単元名 氷見の恵みーハトムギプロジェクトー

(2) 単元の目標

身近な農作物であるハトムギの栽培・焙煎・加工体験やそれらに携わる人々とのかかわりを通して、そのよさや問題点に気づき、ハトムギの魅力を一層広めようと、自分たちにできることを実践することができる。

(3) 単元構想



ハトムギ体験は楽しかったね。
わたしたちにもできそうなことはないかな。

ほく・わたしたちができることに取り組もう
ハトムギプロジェクトパート2
(20時間)

ハトムギでふるさとを元気にするために、
自分たちができることに取り組もう

自分たちのプロジェクトを見直そう

自分たちの取り組みを広めよう

これからもハトムギのよさを広めていこう。

(4) 考察

視点1 探究的な学びを生む単元の構想

〈問題意識が連続・発展する学習過程の工夫〉

子どもたちがハトムギの日々の成長をつぶさに感じ取ることができるように、プランターと学校前の畑でハトムギ栽培を行った。また、刈り取り、焙煎体験、加工体験を行ったり、ハトムギに携わる人々とかかわったりする中で、ハトムギに対する熱い思いに触れ、「ハトムギのよさをもっと広めたい」、「ハトムギで氷見を元気にしたい」という願いをもつことができた。そして、ハトムギプロジェクトを立ち上げ、グループごとに課題を設定し追究する活動を行った。アイスやケーキ、ごはんなどの、ハトムギを使った料理をつくったグループは、つくったものを自分たちで味わったり、他の学年に試食してもらったりした。ハトムギを使った化粧水や入浴剤をつくったグループは、自分たちで使ってみたり、使った人にインタビューやアンケートをとったりして、自分たちの取り組みを見直した。CMやポスター、キャラクターなどをつくったグループは、ハトムギが健康や美容によいこと、使い道が多いことなど、たくさんのよさを広める活動を行った。このように、体験活動やハトムギに携わる人とかかわりを通して、子どもたちは主体的に活動に取り組むことができた。



フライパンを使ってハトムギの焙煎体験

視点2 確かな学びをつくるための評価と指導

〈学びを見直す振り返りの場、自分の変容や成長を実感する場の設定や方法の工夫〉

活動の後にはウェビングによってハトムギと自分とのかかわりを振り返り、感じ取ったハトムギのよさを書き加えていき、自分の課題を明確につかむ手立てとした。また、子どもたちが自分の変容や成長を実感することができるように、「振り返りカード」で自己評価を行った。その際、活動する前と後の自分を比較させたり、どのようなことがきっかけでどのように見方や考え方が変わったのかを具体的にカードに書かせたりするといった支援を行った。そのことによって、子どもたちは、自分の変容に気付くことができるようになった。

視点3 他者と豊かにかかわり、協同的に学び合うための支援

〈学びを広めたり、深めたりする

他者とかかわり方の工夫〉

子どもたちの学びを広めたり、深めたりするために、子どもたちの活動の流れに合わせてハトムギに携わる人とかかわる場を設定した。ハトムギの生産地である校区内の細越地区へ行き、現地で生産・加工されている方と一緒にハトムギ加工体験を行ったり、ハトムギの新しい商品開発に携わっている農協の方から話を聞いたりした。これらのことにより、子どもたちはハトムギの魅力を肌で感じるとともに、それに携わる人々の工夫や努力、熱い思いや願いを知ることができた。



細越地区の方と一緒にハトムギの加工体験



ホワイトボードを活用したグループでの話し合いの様子



専門家からハトムギの魅力について話を聞く子どもたち

〈協同的に学び合う場の設定の工夫〉

課題の解決や活動の節目で、話し合いの場を設定した。「ハトムギでふるさとを元気にしたい」という目標に向かって、ハトムギプロジェクトに取り組む仲間の悩みや問題点について考え、話し合うことで、自分たちの取り組みを見直し、プロジェクトへの意欲を高める契機とした。その際、一人ひとりの異なる課題や取り組みを共有化しやすくするために、共通体験を土台にして話し合うようにした。また、必要に応じてグループでの話し合いを取り入れた。グループでは、ホワイトボードを配布し、話し合いを可視化しながら考えを確認できるようにした。そのことによって、考えを整理し、互いの考えをかかわらせることができた。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ◇ 地域教材に繰り返しかかわることにより、子どもは地域の現状を見つめ、その教材に潜む不安や問題点に出会い、自分にとって切実な課題をつかんで追究を進めることができた。
- ◇ 一人ひとりの活動の累積をホワイトボードに残したグループの活動の記録等が児童の思考を整理する手立てとして有効であった。
- ◇ ハトムギの栽培や加工等に携わる人とかかわる活動を通して、子どもは追究の糸口をつかみながら学びを広げたり深めたりすることができた。

(2) 課題

- ◇ 視点を絞った話し合いができるように、第一発言者の意見の生かし方、焦点化を図る発問の吟味など、教師の支援のあり方をさらに探る必要がある。
- ◇ 地域の人への思いや願いに気付くことができるような体験活動をよりよく繰り返すことで、自分の生き方について考えていこうとする子どもの姿をめざすことが大切である。

4. おわりに

今後も、地域教材を生かし、体験活動を繰り返して、人との触れ合いを大切にしながら、切実感をもって追究を進めることができるような授業づくりに努めたい。

ナカヤマヒロシの てだてだ 16

初めての収穫 わが家のレシピ紹介



教室での掲示の様子

用意する物

- ・ 模造紙
- ・ お便り
- ・ 接着剤
- ・ 学級通信

ポイント

- ① 初めての収穫した野菜は、必ず自宅に持ち帰らせる。
- ② 子どもには収穫したことを話し、レシピや感想など書いてもらいたいことを、自分の口で保護者に話すように伝える。
- ③ 正確に伝えることができない子どももいるので、保護者には、担任から電話で具体的なことをその日のうちに伝える。

手順

- ① 自分で野菜を栽培し、初めての収穫物を家に持ち帰る。
- ② 保護者宛の手紙を添える。
文章例「この野菜は、〇〇さんが育てて初めて収穫したものです。どうぞご家庭で料理してご賞味ください。なおご面倒ですが、レシピ及びエピソード等を書いていただけますと幸いです。教室内に掲示しますのでよろしくお願い致します。担任」
- ③ 保護者からの手紙を、子どもたちに紹介し、教室内に掲示する。
- ④ 保護者の許可を得て、学級通信等に掲載する。



保護者からの手紙の例



中山洋司
(なかやま ひろし)

平和学園 学園長。
40年以上のキャリアの中で、幼、小、中、高、大学及び国・公・私立学校すべての校種を経験。編著に「日本の未来はこれで変わる!」(日本文教出版)など。2007年より現職。



幼・保・小

～幼稚園・保育所から学ぶ連携のヒント～

当園は、1946年に創立した、高知県で最も歴史のある幼稚園である。最も大切にしていることは、子どもが主体の幼稚園ということである。子どもの自主性を重んじ、自分でよく考えながら次々と遊びを展開していけるように環境を整えている。2011年、屋上には、津波一時避難場所を設置した。



野村貞夫 園長先生



教育方針

たくさんある楽しさの中から、好きなことを見つけ、それを大切にしています。それが将来、自らやるべきことを見つけていく人材の育成につながっていくと考えているからです。そしてもう一つは、コミュニケーション能力の育成です。自分を調整し、集団の中でいかに折り合いをつけていくかが大切だと考えています。



先生の話聞く

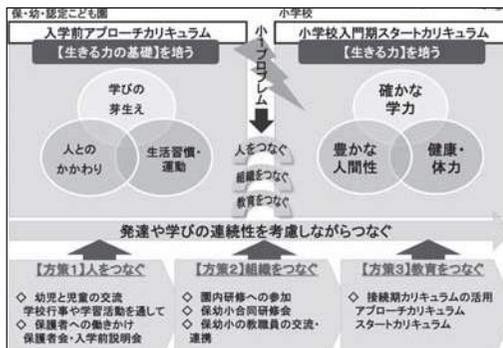
特色

降園は、先生が引率して、五つのコースに分かれて集団で歩いて行きます。保護者には、それぞれ決まった解散場所まで迎えに来てもらいます。暑い日は暑さを感じ、寒い日は寒さを感じ、自然に触れることが大切です。よい匂いを嗅ぎ分け、から揚げ屋の店の前に立ち止まったりもします。店の前を通り、帰ってくるのを待っている地域の人々がいて、子どもは彼らとハイタッチをします。地域の方は、幼稚園、小学校をつなぐ役割も担っています。そんな特色をもつ幼稚園です。



鳴子踊りの練習

連携のポイント こうすればうまくいく！



のびのび土佐っ子プログラム

双方向の交流活動

高知市教育委員会の指定を受け、江ノ口小学校、江ノ口保育園と連携を進めています。

まずは、園外保育として、小学校へ遊びに行きます。中休みが始まる前に行き、誰もいない校庭を思いきり走らせたり、大きな遊具で遊ばせたりします。その後、チャイムが鳴り、小学生が校庭に押し寄せるようになってきて、一緒に遊びます。園児は小学生から刺激をたくさん受け、休み時間が終わると、校舎の裏にある倉庫などを探検したり、手洗いを借りたりして、施設の使い方にも少し触れます。**2回目**は、お弁当を持参し、ゲームをしたり本の読み聞かせをしてもらったりして仲良くなり、一緒に昼食をとります。**3回目**は、小学1年生らがつくったけん玉やぶんぶんごまなどを持参し、園で一緒に遊びます。**最後に**、1日体験入学。年間計4回の交流があります。



スロープ



第9回

あたご幼稚園
(高知県高知市)

連携
の
様子



職員どうし、そして保護者との連携

小学校、幼稚園、保育所の三者で夏休みに合同研修会を行っています。大学の先生が指導に入り、互いの学習や保育の流れなどをグループ討議し、先生たちの意思疎通をしっかりと構築していきます。また、互いに公開授業、公開保育へ足を運び、より風通しをよくしています。

保護者とのつながりも大切です。そこで、江ノ口小学校での生活についてのリーフレットを作成し、就学前健診のときに小学校から配布してもらっています。また、2月には、校長先生から入学前の子の保護者に対して、子どもが小学生になる上での保護者の心構えを話してもらいます。

小学校に期待すること

幼稚園では、例えば、どろ団子づくりをします。そこには、子どもたちが形や質、量などにこだわってつくった作品があります。学びの素地を培っていると思っています。これが学校において、どの教科のどんなところに生かされてくるのかを系統的にとらえ、一緒に学んでいければと考えています。



江ノ口小学校での生活を
まとめたリーフレット



合同研修会の様子

和田先生の

ひとこと

コメント



和田 信行

東京成徳大学 子ども学部特任教授。
東京都生まれ。
都内の小学校教諭を経て、足立区、八王子市の各教育委員会の指導主事、都立教育研究所統括指導主事。
その後、新宿区立四谷第三小学校長兼四谷第三幼稚園園長。
元全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会会長を歴任。
専門は幼児教育と小学校教育をつなぐ理論と方法の研究。

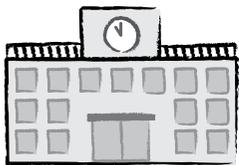
1 教育方針のすばらしさ

幼児期に必要な体験をすることは、その後の子どもの成長や発達において大切なことです。それを園の方針で示しています。好きなことを見つけていくことや集団の中で折り合いをつけていくことなどは、幼稚園での遊びを通した活動で育つ力なのです。

あたご幼稚園で育った力は、小学校でさらに大きく育つことでしょう。

2 双方向の交流活動(年4回)

近隣の保・幼・小が、組織的・計画的に連携をしていることはすばらしいことです。行政のバックアップもあるようですが、年4回双方向で交流をしていることが、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの適切な実施にもつながっているのでしょう。



● 特色ある実践を求めて

生活・総合を楽しむ味

出張のお供は小説。今は池井戸潤にはまっている。「ルーズヴェルト・ゲーム」や「果つる底なき」、「空飛ぶタイヤ」なども読破したが、一番のお勧めは「下町ロケット」だ。DVDも借りて見たところ、ドラマもよかった。町工場の社長がかんなんしく 艱難辛苦を乗り越え、念願の夢である国産ロケットの開発を実現していくプロセスをワクワクしながら味わった。

● ジオパークでの体験型研修 ●

国内にジオパーク(大地に親しみ、大地の成り立ちを知り、人間と地球のこれからの関係を考える「大地の公園」)[鳥取県文化観光局観光政策課作成資料より]はいくつあるだろう。実は33か所もある。そのうち、世界ジオパーク(29か国、100地域)に認定されているのは洞爺湖有珠山、山陰海岸、室戸、隠岐など六つである(2013年12月現在)。

鳥取県教育センターの依頼で、山陰海岸ジオパークの中にある岩美町立渚交流館と山陰海岸学習館を会場に、総合的な学習の時間の研修を行った。山陰海岸学習館の山田佳範専門員の軽妙な語りと感動の3D映像、展示品等々でジオパークを堪能した後、わたしの講演と二つのワークショップを行った。まず、「ジオパーク」を中心に、どのような内容や活動が考えられるかウェビングを行った。ポイントは「探究」、「協同」、「体験」、「言語活動」、「教科等関連」、「地域貢献」の六つとした。そして、その成果を生かし、学年を想定し単元を構想した。縦軸は「課題設定」、「情報収



集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」、横軸は「学習活動」、「教科等関連」、「地域関連・貢献」のマトリクスを用いた。

「地域にあるリソースをどう生かしていけばよいのか、ヒントをたくさんいただいた。」「ウェビングから単元構想づくりを実際に経験したので、校内でもやっていきたい。」といった感想が多かった。

● にじっ子 ONE パーク ●

上越市立大手町小学校(加藤誠雄校長)は文部科学省研究開発学校である。現行学習指導要領の教科・領域を再編成し、「生活・総合」、「数理」、「ことば」、「創造・表現」、「健康」、「ふれあい」の6領域と「学びの時間」を設定している。

5年「生活・総合」の「つくる私・たべる私」の教室では、飼育する牛と豚に名前をつける話し合いが続いている。この時期に毎年繰り返される情景である。ちなみに4年前、豚の名前が決まったのは10月だった。今回は、命名することの意義を考えたとでの話し合いである。すでに牛と豚との対面を済ませている子どもたちは「元気にすくすく育てほしい」という願いを込め、子豚は「ハッピー」と「ヒート」、子牛は「すく」に決定したようだ。

3年「健康」の「にじっ子 ONE パーク」の授業会場の体育館は、まるでワンダーランドと化していた。缶ぽっくりと竹馬に乗った子どもたちがさらなるスキルアップに挑戦していた。遊びを工夫する上で互いのヒントとなっているのが、体育館の壁面にはられている「遊び紹介カード」である。様子がわかる写真やネーミング、ルールやコツが書かれている。「カンポックリダンス」や「ポックリじゃんけん」は楽しそうだ。「竹馬サッカー」はなかなか難しそうだ。ネーミングが面白いのは「ズボリンポックリ」(砂の上を歩く)である。

缶ポックリのチームは「フラフープかわわたり」や「コーンよけ」、「階段のぼり」など複数のゲームを組み合わせで挑戦している。子どもたち自らが様々な障害を設け、それに挑む姿は実に真剣で集中している。まさに「先行き不透明

わいの芥

その⑩



村川 雅弘
MASAHIRO MURAKAWA

鳴門教育大学大学院 教授。
専門は教育工学、カリキュラム開発、生活科・総合的な学習。日本教育工学会理事、中教審専門部会委員などを歴任。

な次代を生き抜く力」が育っている。1月29・30日の公開研究会でその後の展開を見るのが楽しみだ。



響き合い高め合う集団

横浜市立大岡小学校(相澤昭宏校長)は、大手町小学校とともに本連載におけるここ数年の常連校である。学級ごとに、1年がかりの総合的な学習の時間を展開している。新任教員にも例外はない。どのようにして新任教員も単元づくりに入っていきのか。その秘密を探るべく、4月中旬に訪問した。中堅教員が体験活動をもとに課題づくりを行う授業を見せてくれた。敢えて新しい方法(ふせんやミニ黒板を使ったグループ協議)に挑戦している。若手教員へのモデル的な授業にもかかわらず、守りに入らない。この姿勢を若手が学んでいくのだろう。

校内研究では、「基礎勉強会」を参観させてもらった。研究主題でもある「響き合う」、「高め合う」について中堅・ベテランと若手がチームになり、その意味や関係について協議し、模造紙にまとめて行った。「集団は自立した個の集合」、「個々の役割や得意をみんながわかっている、自分もわかっている」、「響き合う集団だからこそ高め合える」、「響き合うためには思考の仕方を視覚化する」、「一人ひとりの考えを意味付け、価値付けることが必要」等々が語られ、共有化が図られる。このような理論研究にもしっかりと取り組んでいるのも、大岡小学校の強みのだろう。彼らこそがまさに、響き合い高め合う教員集団なのである。

今年度赴任してきた相澤校長とは古い付き合いがある。日枝小学校時代にユニークな総合的な学習の時間の授業を見

せてもらった。この頃に刊行した著書には、何度か登場してもらっている。5・6年「炭検!発見!自然のパワー!!」(平成11・12年度)の授業において、教室天井の隅から隅まで炭がぶら下がっていた様子は今でも覚えている。

安心感・信頼感のある学校

横浜市立日枝小学校(大内美智子校長)の総合的な学習の時間は30年ほどの歴史がある。大岡小学校と同様に、学級ごとに取り組む。平成10年前後は年に数回通い詰め、数多くの実践を見せてもらった。子どもが蒔田公園の設計にかかわる「蒔田公園の設計」や外国の人との交流会を開催する「日枝ロシア」、乳製品の歴史を探り表現した「劇団ミルキーズ」など、たくさんの傑作を生んだ。

十数年ぶりに門をくぐった。1年生活科「がっこうとなかよし だいさくせん」の授業を参観した。1階の各部屋と教職員についての探検の発表だった。発表意欲が高く積極的に発言しようとするが、友だちが語り始めると聞き入る。うまく話せない子をじっと待つ。授業者は教師の「出」と「待ち」のタイミングを本時の視点に挙げているが、子どもたちにその姿を見ることができた。また、ファイルやメモを見ることなく、部屋の様子や出会った人のことを語るのだが、そのときの様子が目に浮かぶほどリアリティーがあった。豊かな探検であったことが伺われた。

校内研究において、早稲田大学の藤井千春先生からよい話を聞いた。日枝小学校出身者のゼミ生が「先生はみんな仲がよかった。」、「先生みんなが自分のことをよくわかっていると感じた。」と語ったという。生活科や総合的な学習の時間の効果の一つに、教員の協働性の向上がある。それが子どもにも伝わっていたのだ。その学生の話からどうやら「劇団ミルキーズ」の一員のような。

大岡小学校と日枝小学校の公開研究会は、1月23日午後と24日午前に連続してある。贅沢な組み合わせだ。

生活・ 総合への 提言

～探究的な学習を
実践するためには～



濱邊 昌子
大阪府八尾市立刑部小学校
校長

1 はじめに

昨年のことになるが、第21回大阪府小学校生活科・総合的な学習研究協議会研究大会「中河内大会」（平成25年11月20日実施）に向けて、中河内三市（東大阪市、八尾市、柏原市）の役員・実行委員が集まり、大会主題や内容を検討し冊子を作成した。その中で「生きる力を育む生活・総合」を合い言葉に、『学ぼう 磨こう つながろう』を基本に学習を進めることが大切であると考え、大会テーマを設定した。

このテーマを目標に、本校でも子どもたちに「生きる力」を育てていく取り組みを考え、進めている。

それでは、具体的に生活科の実践を紹介していこう。

2 『学ぼう 磨こう つながろう』の活動を 具体化するために

①《学ぼう》～課題の設定（体験学習などを通して、課題を設定し課題意識をもつ）～

<1年生の学ぼう>

- ・学校探検の前に校内を散歩し、校庭や体育館、プール等を担任とともに見学をした。子どもたちは緊張の中



にも「どんなところだろう」、「見てみたいなあ」という好奇心一杯の表情で仲良く散歩した（学校内の大まかな位置は把握できたようだ）。

- ・2年生の人たちと助け合いながら、学校内の教室の位置を把握する。…【目標】

<2年生の学ぼう>

- ・2年生への進級を喜び、新たな目標をもつとともに、1年生に喜んでもらえることを話し合う。また、1年生に接することで自分の成長に気付く。…【目標】

「1年生のために、何ができるか考える」

- ・学校を案内する ・一緒に遊ぶ ・校歌を教える
- ・勉強を教える
- ・アサガオの育て方を教える 等々の話し合いの結果、1年生と一緒に学校探検をすることに決定

○自分たちが1年生のとき、優しいお兄ちゃん、お姉ちゃんたちに教えてもらったことを思い出した。

◎設定理由：1年生においては、最も年齢に近い2年

生と接することで学校生活への安心感が得られ、また、自分たちへの励みになる。

②《磨こう》～情報収集・整理・分析（情報を収集したり、整理したりして思考する）～

「1年生の立場に立って、世話をすること、気をつけることを考える」…2年生・迷子にならないように手をつなぐ。優しくする。
・案内する場所の説明を考える。
・走ったり、騒いだりしない。
・最後まできちんと頑張る。



1年「がつこうたんけんかあど」

<当日の学校探検の流れ>

1. 2年生が1年生の教室に行き、自己紹介をする。
新しい友だちと仲良くする気持ちをもつために、2年生が1年生の前で校歌を歌い、その後1年生も一緒に歌う。(お互いを知る)
2. 各グループに分かれ、スタート場所に移動する。(全部で10箇所)
3. 各場所の説明係は、説明カードを読む…2年生中心に。
4. その後、各場所の担当者(教師)からシールかサインをもらう。
5. すべての場所を回ったあとは教室に戻り、振り返りカードに記入する。

③《つながろう》～まとめ・表現・振り返り(気付きや発見、自分の考えをまとめ、判断し、表現する、振り返る)～

<1年生の「みつけたよ」カード>より

・学校探検で行ったところの中で特に興味深かった場所を絵で表す。
○支持率が高かったのは、音楽室と理科室、支援学級であった。
○幼稚園や保育所とは違い、校舎や運動場の広さに改めてびっくりしていた。



1年「みつけたよ」カード

○学校には、いろいろな仕事をしている人がたくさん

いることを知った。しかし、1回では覚えられないので、友だちと別の日に探検した。

- 友だちが増え、「学校が楽しい」という児童が増えた。<2年生の「学校を あんないしたよ」カード>より・感想と自己評価、そしてこれからもしてあげたいことを文で表す。
○場所がわからないお友だちに「教えてあげる」と積極的に声をかけている児童がいた。
○登下校や休み時間等に声をかけている児童も増えてきた。また、「仲良くしたい」という気持ちをもった児童もいる。



2年「学校を あんないしたよ」カード

- 2年生は「楽しくできたか」、「約束は守れたか」の二つを振り返り、自己評価した。その結果、多くの子どもは高評価であった。
○コミュニケーション能力を高める第一歩にはなったが、課題はある。

3 おわりに

生活科では、さまざまな気付きを広げ、深めることで、子どもたちに達成感が生まれ、誰かに教えたい、伝えたいという思いが生まれてくる。このことが学習の質を高め、深まりのある探究活動につながるのだと思う。

そして、本校の課題である表現力については、具体的な取り組みを実践し、PDCA サイクルで取り組みを重ねる必要があると考えている。

生活科のおもしろさは、子どもたちの発見やつぶやきから授業が大きく展開することである。そのつぶやきや発見をどう生かすかは、教師の力量にかかってくる。教師は常に創造性をもち、感性を磨き、実践力を付けることである。

そして、探究していくプロセスで子どもたちが輝き、「生きる力」を見つけ出したときに、教師の喜びに変わる。



伏見 稲荷寿司



伏見稲荷寿司ひろめ隊 隊長 杉山大門



三角形のいなり寿司発祥の地として

京都市の南部に位置する伏見区。思い浮かべるのは、幕末の鳥羽・伏見の戦いだろうか。その伏見区に伏見稲荷大社はある。参道の脇には、キツネの石像が祀られており、参拝者を迎えてくれている。伏見稲荷大社の近辺には、20 近くの稲荷寿司を販売する店が並ぶ。稲荷寿司の歴史は古く、江戸時代後期の天宝年間にその記録が残されている。



▲伏見稲荷大社にあるキツネの石像

さて、伏見の稲荷寿司のルーツは、昔、稲荷大神様にお供えをするのに、痛みにくい食べ物として油揚げがしばしば使われていたことに由来する。いつからか油揚げがキツネの好物ということになり、それを使ってつくった寿司の色と形から稲荷寿司と呼ぶようになった。伏見稲荷近辺で売られている稲荷寿司は、ほとんどが三角の形をしており、キツネの顔や耳、伏見稲荷大社のある稲荷山をイメージしているとも言われている。これらのことも影響して、伏見稲荷周辺は、日本有数の稲荷寿司の消費地となっている。

そして、伏見稲荷寿司ひろめ隊は、伏見稲荷周辺の地域に根ざした料理である稲荷寿司を全国に広く周知するよう、地域活性化を目的に 2010 (平成 22) 年 4 月に結成した。

伏見 稲荷寿司のレシピ

材料(4人分の場合)

- ・ご飯 3合
- ・油揚げ 6枚
- ・ごま 少々
- ※他に麻の実等

寿司酢用調味料

- ・酢 大さじ4
- ・砂糖 大さじ1と1/2
- ・塩 小さじ1と1/2

油揚げ煮詰め用調味料

- ・醤油 大さじ4
- ・みりん 大さじ4
- ・砂糖 大さじ4
- ・水 200 ml

つくり方

- ① 油揚げは、熱湯にかけて油抜きして、三角形になるように半分に切り、袋を開く。
- ② 油揚げ煮詰め用の調味料を、まず鍋に入れ、その後、油抜きした三角状の油揚げを入れて 10 分くらい煮詰める。
- ③ 寿司酢用調味料をよく混ぜて、寿司酢をつくる。
- ④ ご飯に、寿司酢を加えて、切るようにして混ぜ、寿司飯をつくる。
- ⑤ ごま、麻の実等をまぶす。
- ⑥ 煮詰めた三角状の油揚げの汁気を切り、寿司飯を詰めて完成。

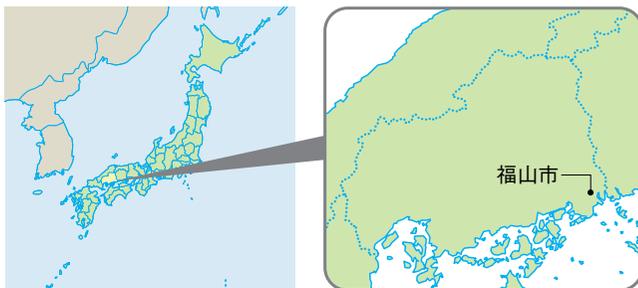


▲伏見稲荷寿司ひろめ隊キャラクター「いなっぎー」

福山ばら祭



福山祭委員会 企画実行委員会 委員長 藤永 忍



ばら祭のはじまり

福山市は、広島県東部に位置し、再来年の2016（平成28）年には市制施行100周年を迎える。

1945（昭和20）年8月8日、福山市をB29爆撃機が飛来、大空襲により市街地の約8割が焼失、多くの命が失われた。戦後、再建復興が進められる中で南公園（現在のばら公園）付近の住民と福山市が協力し、1956（昭和31）年、「荒れた街にうるおいを」をキャッチフレーズに、この公園に約1,000本のバラ苗を植え、見事なバラの花を咲かせた。ここから「ばらのまち福山」の歩みが始まる。

そして1968（昭和43）年、福山市主催による、第1回のばら祭が開催された。1985（昭和60）年には、バラが福山市の花として制定されることとなった。



▲「ふくやま」の名前がついたバラ「ウルヴァリン：FUKUYAMA」

市民が支える「仕組みづくり」

1971（昭和46）年、福山ばら祭の企画運営を担う「福山祭委員会」が設立され、市民と行政が一体となった祭運営が始まった。その後、様々なイベント企画や運営をボランティアの市民団体が支え、現在ではローズボランティアと呼ばれる個人ボランティアも多く参加し、企業の支援も含め、市民が支える仕組みが特色となっている。



▲多くの市民・企業が参加するパレード

ローズマインドあふれるばら祭

福山ばら祭は、毎年5月中旬に行われており、今年は5月17、18日の二日間にわたって開催された。

現在では、市民だけでなく、市外・県外や海外からの訪問団も含め、例年80万人超の来場者でにぎわうようになった。

福山市では、ばら祭を通じて「思いやり・優しさ・助け合い」の精神で、ばらを愛し育てる心「ローズマインド」を、ばらの美しさとともに世界へ向けて発信している。

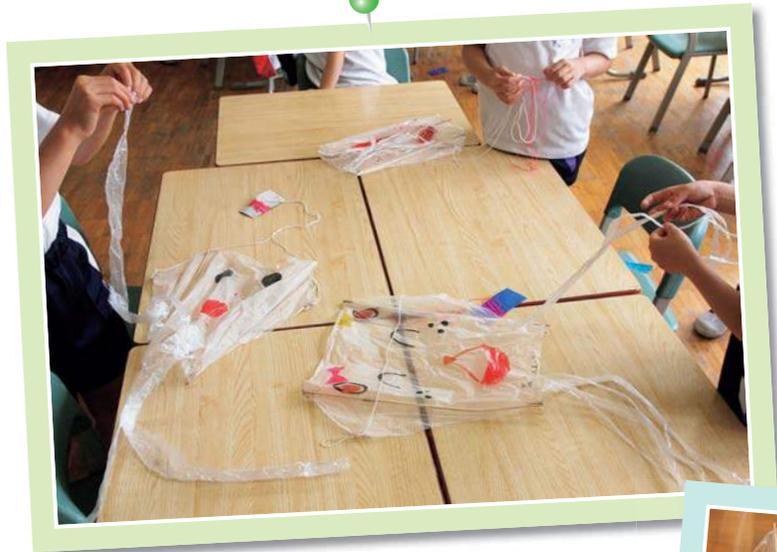


▲市内の小学校にも…

凧をあげたら風の姿が見えてきたよ

北海道教育大学附属札幌小学校

教諭 丹羽 洋彦



2年生・生活科「かぜをかんじて」の実践で、「風を見る道具」や「凧」をつくった。

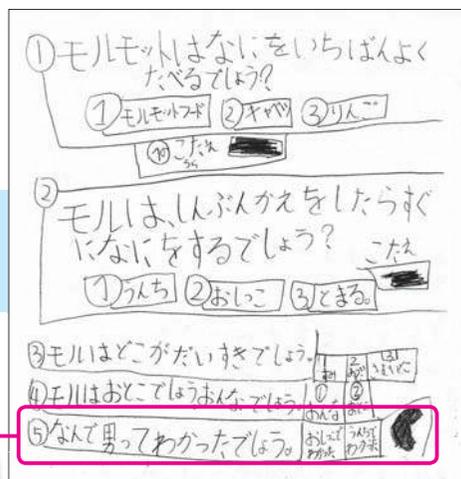
最初は、学校の周囲にある風を身体で感じていたが、ビニル袋やテープを使って風が“見える”道具をつくり始める子どもが現れた。大きな袋を使う子、弱い風でも見つけられるようにビニルテープを細かく裂く子。つくって、確かめて、さらに改良を加えて、風を見るための道具づくりをとて楽しむ様子が見られた。

風の見える道具をつくっているうちに、凧のようなものをつくる子どもが現れた。

そこで、みんなで凧をつくることにした。ビニル袋と竹ひごでつくる簡単なものである。ひらひらとあがる凧を見ながら、子どもたちは「風が上からも吹いている」、「今日の風は昨日と違うね」、「あの場所が一番風が強いかも」と、凧あげを通してたくさんの気づきを生み出していた。

いきもの大すき

～学びのストーリーをひも解く～

愛媛大学教育学部附属小学校
教諭 山田純子せっせと
うち集めA 児の集約
された発問

モルモットクイズのメモ

クイズを
ペープサートに

ペープサートが語る学びのストーリー

学級で飼うことになったモルモットの赤ちゃん。男の子かな?女の子かな?疑問に思ったA児は、なぜか赤ちゃんの糞を集め始めた。「男の子だと、だんだんうちが曲がってくるんだって。」モルモットの糞は、オスはバナナのような形、メスはピーナッツのような形をしている。糞を集めていくうちに、赤ちゃんは立派なバナナうんちをするようになった。「赤ちゃんは男の子!」バナナうんちを見つけたA児は目を輝かせた。

本単元を振り返り、表現する際には、伝えたい内容に応じて表現方法を自由に選ばせて、生き物に対する気付きをのびのびと表出させたいと考えた。子どもたちは気付きをつないだり、まとめたりしながら、絵や言葉、自らの身体でいきいきと学びのストーリーを表現していった。バナナうんちがポロンと出た瞬間を伝えたくて、ペープサートをつくったA児。振り返り、表現する活動を通して生き物との触れ合いを体験することで、教師も子どもと一緒に学びのストーリーをひも解き、子どもの世界に近づきたいものである。

大牟田市立三池カルタ・歴史資料館

梶原 伸介（館長）



日本のカルタ発祥の地として

大牟田市立三池カルタ・歴史資料館は、福岡県の南端にある大牟田市に設置されているカルタ、及び郷土の歴史資料を展示・公開する資料館である。国産最古のカルタとされる「天正カルタ」(芦屋市滴翠美術館蔵)に「三池住貞次(三池に住む貞次)」の記銘があることから、三池地方(現大牟田市域)が日本のカルタ発祥の地とされ、平成3年4月、当地にカルタ専門の資料館「三池カルタ記念館」がつくられた。

ただ、一口に「カルタ」といっても、日本古来の百人一首やいろはカルタ、歌カルタ、花札をはじめ、海外のトランプ、タロット、家族合わせなど多種多様なカードがある。当館ではそれらすべてを「カルタ」と定義し、開館以来その収集や保管・展示に努め、現在では1万点を超える所蔵点数を誇る。開館当初はカルタのみを専門に収集・保管・公開する資料館であったが、平成18年に大牟田市歴史資料館と統合し「三池カルタ・歴史資料館」となり、郷土の歴史も同時に学べる施設となっている。当館では、季節ごとに年間4回の企画展を開催しており、1万点以上の資料の中からテーマを設定し、選りすぐりの逸品を公開している。また、「日本のカルタ発祥の地」を記念して、市民を対象とした「市民カルタフェア」、及び百人一首競技かるた愛好者を対象とした「小倉百人一首九州新人かるた競技大会」を開催し、カルタ文化の普及と浸透にも努めている。



市民カルタフェア

日本最古の「天正カルタ」とカルタのルーツ

上記の国産最古のカルタ「天正カルタ」は、縦6.3cm×横3.4cmの小さな紙片で、油絵の具用の顔料で丁寧な手彩色が施されている。表面には西洋風の「棍棒の王」が描かれ、裏面には「三池住貞次」の文字が記されている。この「棍棒の王」のモデルは、ポルトガルの少年王・セバスチャンと言われている。なぜ、現存最古の「天正カルタ」にポルトガル王が描かれているのだろうか。それは「カルタ」という言葉自体が「タバコ」や「カッパ」、「カステラ」などのように、本来はポルトガル語に起源をもつ言葉であり、ポルトガルにちなんだものが描かれたからである。日本とポルトガルとの関係は、1543(天文12)年にポルトガル船が種子島に漂着し鉄砲を伝えたことに始まるが、その後、キリス



天正カルタ(復元)ト教や西洋の文物が輸入されるようになり、その中の一つにカルタも含まれていた。日本にもたらされたポルトガルのカルタは48枚一組のもので、棍棒・剣・聖杯・貨幣の4つの紋標と、それぞれのエースの札には竜が描かれている。この竜のエース札を「ドラゴンエース」といい、同時代のイタリアやスペインのカードには見られない特徴をもっている。大航海時代にポルトガル船が寄航したペルシャ・インド・スリランカ・インドネシア・日本の古いカルタには、この「ドラゴンエース」が描かれており、ポルトガル様式のカルタが世界各地で使用されていたことを物語っている。

三池カルタの誕生と普及

「天正カルタ」の裏面の記銘を根拠に日本におけるカルタ生産は、筑後国三池で開始されたものと考えられている。三池で生産が開始されたカルタは、やがて一大消費地の京都へと伝播し、多くの人々の需要に応えるようになるが、最初期には三池の優秀な職人が京都に上り活躍したようで、製作者のなかに「三池筑後屋友貞」(『勸遊桑話』)という人物が確認できる。このカルタの普及と流行は、戦国の世の記録にも現れる。1597(慶長2)年の豊臣秀吉による朝鮮出兵(慶長の役)の際、全国の諸将は肥前名護屋(現・佐賀県唐津市)に陣を張るが、その陣中で土佐の大名・長宗我部元親は家臣に対し、「博奕^{ばくあき}カルタ諸勝負禁止」というカルタ禁止令を発している。この事例は、当時ポルトガル伝来のカルタが上流階級、特に武士の間で流行していたことを示している。

歌カルタの誕生

ポルトガルからカルタがもたらされる以前から、日本には「貝覆^{かいふく}」という優雅な遊びがあった。今日ではむしろ「貝合わせ」の名で一般には知られているが、貝覆と貝合わせは本来別のものである。平安時代に始まったとされる貝覆は、ハマグリの貝殻を数10組伏せた状態で並べて、その中から対になるものを選び取る。日本人はポルトガル伝来のカルタを、この貝覆に応用することを思いついた。すなわち、その素材を貝から紙へ転換することで「歌カルタ」を考案するのである。当初は貝覆の流れを汲む貝型の歌カルタが作られるが、時代を経るにしたがい形を変え、将棋駒型や扇型、櫛型などのカルタが登場する。歌カルタは庶民の間でも大いに遊ばれたが、公家や大名、大商人の家族の遊び道具や嫁入り道具としても重宝された。題材としては、源氏物語・伊勢物語・小倉百人一首などが好まれた。枚数



将棋駒型カルタ

も三十六歌仙は36組・源氏物語は54組・百人一首は100組、古今集になると1000組を超えることもある。上流階級の家では、費用を惜しまず狩野派や土佐派の絵師に依頼して豪華な札をつくらせたのである。

いろはカルタと花札

貝覆から発展した合わせカルタの代表は歌カルタであるが、この他にも漢詩や俗謡など多種多様なものが生み出された。その中で一般によく知られているのがことわざカルタであろう。ことわざカルタの起源については諸説あるが、遅くとも元禄期までに上方で製作されたとする説が有力である。上方では「一寸先は闇」、江戸では「犬も歩けば棒にあたる」といった教訓的な言葉を記した文字札と、それを絵画化した絵札で構成され、江戸中期以降、これを50組集めた木版刷りのカルタが大々的に売り出される。そしてこの頃に、いろはの文字ごとに1枚ずつ、合計47組に「京」を加え48組に編成し直した、たとえ合わせのカルタが登場する。これ以降、折からの児童教育の勃興と相まって、子ども向けのカルタとして好評を博すことになる。



一方、合わせ 江戸いろはカルタの一種で、めくり札の流れを汲むとされる花札は、花鳥風月を盛り込んだ、いかにも日本らしいカルタである。京都・大坂・瀬戸内海沿岸から日本海沿岸にかけての地域では、札に和歌が添えられているものが好まれ、競技法も札の組み合わせが得点になるものだったが、江戸・関東、東北地方の太平洋沿岸地域では、和歌のない札が好まれ、競技法も各々の札に固有の点数がついていて、それを集めるといったものであった。幕末になると、地方に分散し、花巻・山形・淡路・徳島などで生産が始まり、これらの製造者たちが地方の好みに合わせた「地方札」の製作の担い手となっていくのである。

参考文献：
『図説カルタの世界』(大牟田市立三池カルタ記念館・平成14年)

わたしの学校の特色

のび 神奈川県横須賀市立野比小学校

—幼稚園・保育所との円滑な接続を—

校長 新倉 邦子

本校は、三浦半島の東端に位置し、京浜急行YRP野比駅の近くにある。房総半島を臨む、海あり川あり、様々な業種の商店街ありと環境に恵まれた地域に立地する。

児童数は624名、ここ数年少しずつ子どもの数が増えている活気のある小学校である。教師の大半は20歳代、30歳代で、パワフルでやる気がみなぎっている。

スタートカリキュラムの活用

今年度も多くの幼稚園・保育所から子どもたちが入学してきた。体験や環境の異なる109名の児童が円滑に小学校生活に慣れるには、受け入れる小学校側の工夫も必要である。

今年度は、昨年度の1年生担任が作成したスタートカリキュラムをもとに、入学当初から学年活動を中心にその実践に取り組んできた。

教科という概念がない入学間もない児童にとって、様々な活動をしながらいつの間にか教科の学習になじんでいくというかたちのスタートカリキュラムが有効だ。例えば、「楽しく校歌を歌いましょう。」と音楽の授業が展開される。

また、児童にとっては、学年活動を通して、学年全体の児童の顔や名前を覚えることができる。保護者にとっても、学習内容が学年で足並みを揃えているので安心だ。さらに担任の連携も円滑になる。



ここにこタイム（学年活動）

児童の学びを揃える学年会



1年・学年会

週1回の学年会では、次週の学習や行事の確認、児童の情報交換、教材研究等を行う。各担任が学級をオープンにして、十分学習内容を話し合うことで、児童の学びを揃えることができる。学習内容には、担任の考えで指導したほうがよいものと、学年として同じ指導をしたほうがよいものがあるからだ。

わたしは、教室での学年会を勧めている。児童の椅子に座り教室環境を見ながら、実際の教材を前に話し合うことができるからだ。

わたしは、教室での学年会を勧めている。児童の椅子に座り教室環境を見ながら、実際の教材を前に話し合うことができるからだ。

幼稚園・保育所との連携

今年度は、4月の下旬、幼稚園・保育所の先生方が、入学して1か月の1年生の授業を参観し、情報交換を行った。年長児のたった1か月の成長に目を輝かせていたのが印象的だった。それぞれの園で取り組んだほうがよいこと、小学校が取り組まなければならないこと等の意見があり、有意義な研修会となった。今後も、幼稚園・保育所との連携を活性化させ、小学校への円滑な接続を実施していきたい。



学校探検の情報交換



好評
発売中

日本文の書籍シリーズ



生活科の理論と実践

—「生きる力」をはぐくむ教育のあり方—

生活科誕生より約20年、その歴史を振り返り、今一度生活科の本質を改めて見直し、新しい生活科の姿、教科特性を論じる。理論を具体的に補完する実践例も収録。若手からベテラン教師まで必携の一冊。

編著 木村吉彦 (上越教育大学大学院)

定価 **2,160**円 (本体2,000円+税8%)

A5判 240頁 ISBN978-4-536-60058-3



学習指導要領解説

生活科 新たなるステージへ

理論重視ではなく、具体的な実践イメージから学習指導要領のポイントがつかめる解説書。

編著 村川雅弘 (鳴門教育大学)

和田信行 (東京成徳大学)

中山洋司 (平和学園)

定価 **1,944**円 (本体1,800円+税8%)

B5判 192頁 ISBN978-4-536-60003-3

お求めは、書店、ブックサービスでお願い致します。

※商品のお問い合わせは、お手数ですが、裏面所在地より小社大阪本社業務部へお願い致します。

スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる!

- 1 スマートフォンまたはタブレットで、ストアアプリを起動します。
- 2 「カザスマート」で検索し、アプリをダウンロード。
- 3 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
- 4 マークがあるページで紙面全体にかざすと、動画が始まります!



★表紙裏 (い〜め〜る), P.26 (ご当地料理紹介), P.27 (わが町オススメ行事) で視聴できます。
※動画は、2014年12月31日まで視聴することができます。

Dr.小林の これなあに？

写真の達人、小林先生が、撮りためた写真の中から
とっておきを紹介します！



小林 辰生

上越教育大学大学院 教授。
1952年、岡山県生まれ。専門は理科教育学。タンポポの教材化に関する研究で、兵庫教育大学から博士(学校教育学)を取得。散歩に出かけて足もとの自然をカメラにおさめるのが趣味。

セイタカアワダチソウ

セイタカアワダチソウは、北アメリカ原産のキク科の多年草です。河原や空き地などに群生しているところをよく見かけます。秋になると、河原などが黄色い花で一面おおわれることがあります。



①ミツバチなどの昆虫が蜜と花粉を求めて、たくさん集まっています。昆虫の働きで受粉が行われます。



②花の房を拡大してみました。小さな花がたくさん付いています。それぞれの花が綿毛の付いた果実になります。



③地下茎でも増えます。冬まだ寒い頃に葉を出します。暖かくなるとぐんぐん背丈が伸びて、2メートル以上になることもあります。



④果実を拡大してみました。綿毛が付いています。



⑤たくさん付いた果実の綿毛は、泡だったように見えます。セイタカアワダチソウの名前は、この姿に由来します。

小林先生への質問、ご感想、先生の写真を授業で使いたい！
などなど、お便りお待ちしております。

日本文教出版 HP → 問い合わせフォーム もしくは、連絡先を記入の上、
FAX (03-3389-9359, 生活科編集部宛)にてお寄せください。

生活&総合navi vol.69

日文教育資料[生活・総合]
平成26年(2014年)9月30日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

表紙イラスト 伊東恵美

CD33241

日本文教出版 株式会社

http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵1-13-18-7F-B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690